

Title	リキッド・モダン社会における道德の可能性： バウマン社会理論の抱えるディレンマについて
Sub Title	Theoretical dilemma in Zygmunt Bauman's social theory : possibility and impossibility of his moral theory in liquid modernity
Author	菅野, 博史(Kanno, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2011
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.54, No.5 (2011. 12) ,p.39- 50
JaLC DOI	
Abstract	<p>イギリスの社会学者、ジグムント・バウマンは現代社会の抱える諸問題について多くの著作を書き表し、多方面に影響を与えている人物である。取り上げる主題も多岐にわたり、その内容においても錯綜している彼の議論を、ここでは道德理論と消費社会論という、いわゆるリキッド・モダン社会をめぐる彼の社会理論のなかでも中心をなす部分を検討するなかで整理し、そこから生じるディレンマについて明らかにする。</p> <p>まずバウマンの立場である個人主義的な道德、アンビヴァレントな選択としての道德という考え方について説明する。つぎにリキッド・モダン社会とは消費社会であることを明らかにしたうえで、消費社会が商品選択の幅を増大させる、自由な社会でもあるということを見てゆく。しかしながら、こうした商品選択の自由は道德的な選択とは重ならないということを確認したうえで、バウマンの道德にかんする主張が「道德的な二者関係」を超える社会的連帯には結びつかないものであることを指摘する。最後にこのような理論的ディレンマは、バウマンの社会理論に内在する限りにおいて致命的な欠陥であることを述べるとともに、別の理論的見通しの必要性を説く。</p> <p>In Zygmunt Bauman's social theory, discussions about morality and consumerism are two indispensable parts of his entire theory. But the relationship of the two concepts are not clear in his writings, so I critically clarify the contents of his concepts and come to the conclusion that Bauman's conception of morality is important but it's not beyond the "moral party of two" in social dimension of his theory. To save this theoretical dilemma, I suggest there must another theoretical perspective be needed in his extistent liquid-modern theory.</p>
Notes	工藤教和教授退任記念号 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20111200-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リキッド・モダン社会における道德の可能性
——バウマン社会理論の抱えるディレンマについて——

Theoretical Dilemma in Zygmunt Bauman's Social Theory:
Possibility and Impossibility of His Moral Theory in Liquid Modernity

菅野 博史(Hiroshi Kanno)

イギリスの社会学者、ジグムント・バウマンは現代社会の抱える諸問題について多くの著作を書き表し、多方面に影響を与えている人物である。取り上げる主題も多岐にわたり、その内容においても錯綜している彼の議論を、ここでは道德理論と消費社会論という、いわゆるリキッド・モダン社会をめぐる彼の社会理論のなかでも中心をなす部分を検討するなかで整理し、そこから生じるディレンマについて明らかにする。

まずバウマンの立場である個人主義的な道德、アンビヴァレントな選択としての道德という考え方について説明する。つぎにリキッド・モダン社会とは消費社会であることを明らかにしたうえで、消費社会が商品選択の幅を増大させる、自由な社会でもあるということを見てゆく。しかしながら、こうした商品選択の自由は道德的な選択とは重ならないということを確認したうえで、バウマンの道德にかんする主張が「道德的な二者関係」を超える社会的連帯には結びつかないものであることを指摘する。最後にこのような理論的ディレンマは、バウマンの社会理論に内在する限りにおいて致命的な欠陥であることを述べるとともに、別の理論的見通しの必要性を説く。

In Zygmunt Bauman's social theory, discussions about morality and consumerism are two indispensable parts of his entire theory. But the relationship of the two concepts are not clear in his writings, so I critically clarify the contents of his concepts and come to the conclusion that Bauman's conception of morality is important but it's not beyond the "moral party of two" in social dimension of his theory. To save this theoretical dilemma, I suggest there must another theoretical perspective be needed in his existent liquid-modern theory.

リキッド・モダン社会における道徳の可能性

——バウマン社会理論の抱えるディレンマについて——

菅野博史

<要約>

イギリスの社会学者、ジグムント・バウマンは現代社会の抱える諸問題について多くの著作を書き表し、多方面に影響を与えている人物である。取り上げる主題も多岐にわたり、その内容においても錯綜している彼の議論を、ここでは道徳理論と消費社会論という、いわゆるリキッド・モダン社会をめぐる彼の社会理論のなかでも中心をなす部分を検討するなかで整理し、そこから生じるディレンマについて明らかにする。

まずバウマンの立場である個人主義的な道徳、アンビヴァレントな選択としての道徳という考え方について説明する。つぎにリキッド・モダン社会とは消費社会であることを明らかにしたうえで、消費社会が商品選択の幅を増大させる、自由な社会でもあるということを見てゆく。しかしながら、こうした商品選択の自由は道徳的な選択とは重ならないということを確認したうえで、バウマンの道徳にかんする主張が「道徳的な二者関係」を超える社会的連帯には結びつかないものであることを指摘する。最後にこのような理論的ディレンマは、バウマンの社会理論に内在する限りにおいて致命的な欠陥であることを述べるとともに、別の理論的見通しの必要性を説く。

<キーワード>

道徳におけるアンビヴァレントな選択、消費社会、他者のための責任、道徳的な二者関係、理論的ディレンマ

1. はじめに

衰えることを知らぬ執筆活動により、バウマン社会理論の「森」は近年ますます木々が生い茂り、蔭が複雑に絡みあう鬱蒼としたものになっている。これは「バウマンの森」を取り巻く社会環境の大きな変化に伴って、いわばこの「森」自体が環境に適応しようとして急速にその形態を変えた結果だということもできるが、それによってこの「森」自身の見通しがたゞも以前にも増していますますます高まっている。そこで本稿では、この木深い社会理論の「森」に一条の光を投げかけ、ある角度からこの「森」の全体像を浮かび上がらせることを試みることにしたい。言葉を変

えていえば、バウマン社会理論のもつ可能性と不可能性の中心を見定めることを目指したいと思う。

ケルナーが述べているように、バウマンは「エッセイスト、批評家、大きな理念の分析家、そして社会の全体像や問題点の提供者として優れている」ばかりでなく、「その時代にみられる邪悪で罪深い物事を攻撃して、より人間的でまともな道徳的見通しに向けた概略を示すような、卓越したモラリストでもある」(Kellner 2002 [1998]: 341)。特にポスト・モダンへの転回を果たして以降のバウマンの議論は、スマートも論じているように「道徳の社会学理論への分析的転回」(Smart 2002 [2001]: 191)を遂げた¹⁾と形容されるべきものである。こうした指摘からもわかるように、バウマン社会理論における柱の一つは、道徳や倫理¹⁾に関わる議論であることは論を俟たない。

その一方で、ポスト・モダンの概念を引き継ぐ形で提唱されたりキッド・モダニティの概念、とりわけグローバルに展開する経済活動によって生み出された、新たな格差社会²⁾についての分析は、バウマン社会理論のもう一つの柱であるといえることができる。ここから、バウマンの「森」の見取り図を描こうとする本稿が問うべき課題は、これら二つの柱がどのように切り結び(あるいは切り結ばず)、それらは相互にどのような関係にあるのか(あるいは互いにすれ違っているのか)ということ²⁾を明らかにすることにあるといえる。さらにこうした試みは、バウマン自身がさまざまに揺れ動きながらも、結局のところ完全な形では答えていない、この課題に対する解答を、われわれなりに引き出し、その可能性と限界をともに明らかにする作業でもある。

論述の筋道を予め簡単に示しておく。まずバウマンの道徳についての考え方を検討し、それが社会の性質というよりも個人の選択に基づくものだと主張されている点を明確にする。次にリキッド・モダン社会とは取りも直さず消費社会であることを明らかにし、リキッド・モダン社会の基本原則が、個人の自由な選択というものにあることを見ていく。最後に、バウマンがしばしば口にする道徳の非力さは、それに固有の性質から由来するというよりも、バウマンの社会学理論に内在的な問題であることを明らかにする。こうした議論の結果として見えてくるのは、バウマンが自らに課した理論的な制約のゆえに生じることになった、一つのディレンマである。

2. 個人主義的な道徳とは？

バウマンは道徳には二つの類型があると主張し、それを説明するために「モーゼの十誡」と「アダムのエデンの園からの追放」という、旧約聖書の有名な二つの説話を取り上げて印象的な分析を行っている(Bauman 1998: 12-4)。すなわち、「モーゼの十誡」の説話に従えば、道徳とは神の掟に従うこと、つまり法の遵守を意味するとする一方で、「エデンの園」の説話に従うときには、道徳とは善悪の智慧の木の実を食べたアダムが、善と悪との間でつねに選択を行わざるをえない状況に陥ることを意味するということである。これら二つの道徳の類型をいま、われわれ

1) 本稿では道徳と倫理という概念を、善／悪にかんして下される個々の判断を示すものとしては道徳、そうした判断が社会的に共有された状態のことは倫理と呼ぶことで区別することにしたい。この論点については、中島(2009: 51-3)も参照のこと。

2) 例えば、バウマン(2005 [1998] = 2008)やバウマン(2004 = 2007)など。

なりに普遍的原則に基づく「法への一致」型の道德と、個人的判断に基づく「アンビヴァレントな選択」型の道德と呼ぶことにしよう。このとき、「法への一致」型の道德を人びとに強要することは、もう一方の類型である、善悪の「アンビヴァレントな選択」型の道德に人びとが従うことを制限もしくは不可能にしてしまう可能性が高いため、これら二つの道德類型は互いに鋭く対立する性質をもつことが見てとれる。

このうち道德の源泉を社会規範に求める「法への一致」型の考え方は、ホップズやルソー、デュルケムなどの名前を挙げるまでもなく、社会理論の常道に見られる中心的思潮であるといえる。しかし、バウマンはあえて後者の考え方、すなわち「アンビヴァレントな選択」型の道德という考え方を、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスとデンマークの神学者クヌド・ハーストラップという二人の人物の助けを借りながら、自らの社会理論のうちに導入するのである。それはなぜかといえ、その理由は大きくいって三つある。

まず「人間は「生まれながらにして」³⁾道德的であり、道德的であることはおそらく人間性を構成するような属性」(強調は原文)(Bauman & Tester 2001: 44)であって、それが他の生き物と人間との違いを生み出しているとバウマンが考えていることによる。バウマンに従えば、このことはNoと言える人間の言語能力に由来するものであり、この能力によって物事は現状とは異なった「より良いもの」でもありえると、道德的に認識されることになる。言語を操る人間は、そのこと自体において道德的であらざるをえないわけである。こうした事態の了解を前提にすれば、バウマンの次の言葉の意味が明らかになる。「道德とは、結局のところ(いやむしろ何よりもまず)、選択をめぐるものなのである。選択がなければ、道德は存在しないのである」(Bauman & Tester 2001: *ibid*)。これを敷衍すれば、先にも触れたように、たとえ「法への一致」を強制されたとしても、人間はそれに対してつねにNoと言えるし、そのような社会的強制のなかにおいても、「より良い」道德的状态を選択することができるということになる。

第二の理由は、いま述べたこととも関わるが、ナチスドイツによるホロコーストという極限的状况においても、道德的でありうるような人間的主体を描くことが可能な社会理論の構築を目指す、バウマンの決して譲ることのできないこだわりがある。社会全体に行き渡る「法への一致」を求める立場は、「集団によって、あるいは集団全員によって糾弾された個人の行動の方が道德的であり、逆に、社会、あるいは社会全体が推進する行動の方が非道德である」(バウマン 1989=2006: 231-2)という、かつてのホロコーストでは典型的な状況において、自らの立場の道德的な歪みを正すことができない。バウマンによれば、近代社会の道德的特徴(それは取りも直さず「法への一致」型の道德がもつ特徴でもある)にはこうした歪みをもたらす要因、すなわち個人から集団(組織や制度)への道德的責任の移行と、さまざまな行為を道德的に無関心化(*adiaphorization*)することで、道德的責任を感じずに個人が自らの職務を遂行できるようにすることが含まれているという(Bauman, Cantell & Pedersen 2002 [1992]: 18)。従って、こうした近代社会に特有の道德のあり方、そしてその歪みに対抗するためには、道德を個人の選択の側へと取り戻す

3) これ以降の引用においても、強調は原文のものである。

しか方法がないとされるのである（バウマン 1989=2006: 232）。

三つ目の理由は、モダニティを反省する段階にいたったポスト・モダン社会の到来によって、理性の力で「法への一致」型の社会規範を社会の隅々にまで行き渡らせようとする近代社会のこれまでのやり方は、結局はうまくいかないものであることが人びとに気づかれ、社会はアンビヴァレントで多様な選択肢に満たされていることが白日の下にさらされることになったという、バウマンのポスト・モダン社会をめぐる認識に基づいている。バウマンによれば、ポスト・モダニティとは近代社会による「法への一致」の強制から自由になった、「幻想を抱くことのないモダニティ」（Bauman 1993: 32）なのであり、そこでは「アンビヴァレントな選択」としての「道徳は、ついにその真価を発揮する可能性を手に入れた」（Bauman 1993: 36）とされるのである。近代社会の大きな物語が崩れ去った状況のなかで、大きな物語の構築という強迫観念にとりつかれた「法への一致」型の道徳ではなく、個人の「アンビヴァレントな選択」の側に基礎をおく道徳の方に順番が回ってきたというわけである。バウマンによれば、「法への一致」を追い求めること、そしてアンビヴァレンスを社会的に消去することは、モダニティのあり方が変容した現在、不確実で見通しがたいポスト・モダン状況で芽生えてきた道徳意識を、窒息させてしまうことになる。それゆえに、「規約と規範は道徳的關係の始まりではなく、終わりなのである。それはしばしば、道徳的己の終焉といってもよい」（Bauman 1998: 16）とも主張されるのである。こうして現在の社会状況においては、道徳とは最終的には個人によって担保されるべき、個人的な事柄となるわけである。

個人の「アンビヴァレントな選択」から生じる道徳的責任は、社会における「法への一致」を求めることで生み出される契約的義務と対比される。道徳的に責任をとること、顔をもつ具体的な他者に対して無条件の責任をとること、「他者のためにあること」（being for the Other）を選択するということは、私という個人の側で一方向的になされることであり、社会一般の契約的義務ではありえないからである。さらに社会における「契約的義務が矮小化しがちな状況でこそ、道徳的責任が増大する」（Bauman 1998: 19）、つまり私に契約的義務の履行を求めることすらできないほど弱くて力をもたない他者（の顔）こそが、私に対して道徳的責任を喚起するとされるのである。バウマンを引用しよう。

自らの無力さによって、他の人びとに義務として強制可能な責務を、自分自身に対して果たすようせがむことで、自らの福祉を支えることすらできない他者の顔にさらされたとき、道徳的責任は急激に増大する。そして、その他者が自らの必要を目に見えるものに、その要求を聞き取れるものにできないほどに弱いとき、それはよりいっそう増大するのである。他者の弱さが私に影響力をもたせる。このとき私が責任をとり、語られざる要求に言葉を与えることにすべてがかかっているからである。私は、文字通り、こうした他者の生と死に対して責任があるのである（Bauman 1998: ibid）。

バウマンのいう道徳的責任は、顔をもつ具体的な他者との対面的な関係、つまり「道徳的な二

者関係」(moral party of two) から生じるものである。端的にいえばそれは、私が「他者のためにあること」を選択⁴⁾することであるといえる。そしてその選択には「法への一致」を目指す契約的義務の体系にみられるような合理的根拠が何も存在しない。しかし道德的責任の「アンビヴァレントな選択」が人間の本性に基づくものである以上、道德的衝動は個人のうちに絶えず湧き上がり、それを抑えることはできないとされるのである。

このように、道德のあり方として「法への一致」を目指すような契約的義務の概念を否定している以上、バウマンの議論においては、この「道德的な二者関係」から生じる個人的な道德的責任を、第三者を交えた共通の倫理へと社会的に再編成する可能性は、論理的に存在しないことになる⁵⁾。この意味で、例えばラッシュ (Lash 2002 [1996]: 358-9) が、バウマンのいうポストモダンの倫理⁶⁾は合理的根拠を欠いたものであるばかりでなく、非政治的で応用可能性に乏しいものだと批判するのは、もっともなことであるといえる。

バウマンはこうした批判に答えるために、独特のアレゴリーを用いた回答をしている。すなわち、人間の肉体に備わった足だけではわれわれは十分に遠くまで行くことができないが、移動の理念をもつことで乗り物を発明し、人間は可能な限り遠くまで行けるようになったのだ、と (Bauman 1998: 21-2)。確かにバウマン流の道德の理念を、「道德的な二者関係」を超えて社会一般に適用することは、こうした理念の力を持ち出すアレゴリーによって説明できるようにも思える。しかし他方で、「社会」とは、他者の顔が現れるたびに生まれて、われわれの脳裏を去ることがない「他者のための責任」、実際に人びとがともにあることと不可分のこうした責任を切り離し、中立化し、抑えることを通じて、本質的に道德的な人間たちが、自己中心的で、自己準拠的な自分本位の生活を送ることを可能にする戦略かもしれない (Bauman 2007: 50-1) と指摘するバウマンにとって、「道德的な二者関係」を超えるときには変質してしまう個人の道德的衝動を、この二者関係から遠いところに存在する社会へとアレゴリー的に適用することは、やはり無理があると考えざるをえないのではないか。結局のところ、他者の顔を消去することなく、個人の道德的選択を社会一般の倫理へと広げることはできないからである。

4) レヴィナスの *responsabilité* 概念は、選択に関わるものではない。それは現象学的なアプローチに基づく「いっさいの受動性よりも受動的な受動性」(熊野 1999b: 116) の領野に関わるものであり、つねにすでにわれわれに負わされている、いわば「責め」とでもいうべきものである。こうしたレヴィナスの現象学的言説に引きずられて、バウマン社会学における道德概念の社会理論からの逸脱を批判すること (例えば、Junge 2002 [2001]) は、中島 (2009: 第3章) も指摘する通り、的外れなものでしかない。

5) バウマンは地平としての正義 (Bauman & Tester 2001: 65)、つねに更新される未完的なものとしての正義 (Bauman 1997: 68-9) といった正義概念を披露し、道德は正義の学校である (Bauman 1997: 51) とか、道德と正義とのアンビヴァレンス概念を通じた同形性 (Bauman 1997: 69) などを指摘しているが、両者の論理的つながりを示すことはできず、ただそれは政治的行為によってのみ媒介されると主張することができるだけである (Bauman 1997: 65)。

6) ポスト・モダン状況から説き起こされたバウマンの道德理論において、社会的に共有された倫理が斥けられている以上、「ポスト・モダンの倫理」なるものは実際には存在しないことになる。

3. 消費社会としてのリキッド・モダン社会

リキッド・モダン社会に先立つソリッド・モダン社会とは、バウマンによれば、国境によって境界づけられた国民国家の権力、パノプティコン型の規律訓練によって人びとが管理され、理性的な計画に基づく明確な秩序が社会の隅々にまで行き渡るように意図された社会の類型であった。それに対してリキッド・モダン社会とは、グローバルな経済の規制緩和（deregulation）と民営化＝私化（privatization）の進展によって、これまでの国境や国家がもっていた意義が薄れると同時に、共同体の社会的紐帯から切り離されてしまった、いわばむきだしの個人たちが、不確実で不安定な社会的基盤のうえで、つまりポスト・モダン的な状況のうちで、自らの責任において行動しなければならないような社会の類型のことである。

これを別の言い方でいえば、ソリッド・モダン社会とは生産者の社会であり、「抜け目なさや長期的な用意周到さ、耐久性や安定性、何よりも永続的で長期的な安定性」（Bauman 2007: 31）に重きを置いた社会であるのに対して、リキッド・モダン社会とは消費者の社会であり、「欲望の不安定性と欲求の飽くことなさ、そこから生じる刹那的な消費と消費対象に対する刹那的な廃棄への傾向」（Bauman 2007: ibid）を示すような社会だということができる。バウマンは消費社会の理念型として「消費者中心主義」（consumerism）⁷⁾を提示しているが、それは「日常的で永続的な、いわば「支配体制に中立的な」人間の必要、欲望、願望を、社会の主要な推進・作動力へと、つまり組織の再生産、社会統合、社会的階層化および人間個々人の形成を一つにまとめあげるような力へと作りかえることによって生み出された、社会的布置の類型なのである」（Bauman 2007: 28）。

さらにバウマンによれば、生産者の社会では労働力の売買という社会的現実が「商品の物神化」によって人びとの目から隠蔽されてきたのに対して、消費者の社会では自分自身が商品として売買されるという社会的現実が「主体の物神化」（subjectivity fetishism）によって人びとから隠蔽されているのだとされる（Bauman 2007: 13-5）。すなわち、われわれは物の買い手として何かを買うことで、その都度自らの主体性を確保しているのであるが、消費社会における自らの商品化という現実、こうした行動が繰り返されることによって不可視化されているというのである。バウマンが「われ買い物をする、ゆえにわれあり」（I shop therefore I am a subject）（Bauman 2007: 17）と述べる所以である。

この生産者の社会から消費者の社会への移行は、社会的に個人が拘束されて選択の余地がない、あるいはそれが制限されていた状態から、個人的選択の幅が拡大していく過程としてもとらえることができる（Bauman 2007: 61）。つまりそれは、個人的自由の増大なのである。「もし「自由で

7) ケルナーによる批判、すなわちバウマンはポスト・モダンという言葉でポスト・モダン思想による社会認識や新たな知識人の時代的役割は示していても、ポスト・モダン社会の特徴は描けていないという批判（Kellner 2002 [1998]: 341）に対して、バウマンはこの「消費者中心主義」の理念型で応えているということができる。

あること」が自分の願望に基づいて行為し、選択した目標を追求できることを意味するのなら、リキッド・モダンにおける消費者の生活様式は、すべての人に自由を約束するものであるのかもしれない」(Bauman 2008: 139)。

ここでバウマンのいう自由について、少し敷衍しておこう。いまフロイトにならって、個人的欲求の充足を目指す「快樂原則」と、社会的規範によってそれを規制する「現実原則」という二種類の原則を持ち出せば、バウマンのいう自由とは社会的秩序を表す「現実原則」の対極に位置する、「快樂原則」を追求する個人の側に存するものだけということができる(バウマン 2001=2008: 61-5)。またソリッド・モダン社会では社会的權威を帯びた「現実原則」が優位に立っていたのに対して、規制緩和と民営化=私化の過程を経ることで、リキッド・モダン社会では個人的選択に基づく「快樂原則」が優位に立つようになったのである。「リキッド型の現実原則に内実を与えるようなリアリティーを設定すること(可能で望ましい場合には、それを固定すること)は、快樂原則が命じる目標を追求するのと同じように、いままでは個々の消費者たちに委ねられているのである」(Bauman 2007: 91)。つまり旧来の社会的規範はその力を失い、個人としての消費者が自由に選択⁸⁾を行うことを通じて、ソリッドな社会的統合を欠いたリキッドな個々人からなる社会的集合体が形成されるようになったというわけである。「ピエール・ブルデューがすでに20年前に示していたように、強制は刺激に取って代われ、行動パターンの強要は誘惑によって、行動の規制はPRと広告によって、そして規範的規制そのものも新たな必要と欲望の喚起によって、取って代わられてしまったのである」(Bauman 2008: 50)。

現実原則を欠いた人びとの社会、いわば底の抜けた状態にあるわれわれの住む消費社会は、ポスト・モダン概念の中核をなす不確実性・不安定性を体現する社会であり、「快樂原則」に従って自由な選択を謳歌する個人の集合体からなる、リキッド・モダン社会なのである。しかしながら、先の「主体の物神化」批判からも見てとれるように、バウマンはこうした消費社会を単純に賞賛する立場に立つわけでは決してない。むしろバウマンは消費社会の批判者たらんと望んでいるのだといえる。そしてその場合、彼の消費社会に対する批判点は、大きく言って二つあると考えることができる。

まず消費社会からの落伍者である、しばしばバウマンによって欠陥のある消費者(flawed consumers)とか失敗した消費者(failed consumers)、あるいは非消費者(non-consumers)などと呼ばれる、アンダークラスの人びとの存在である。「無能で怠惰な[消費社会への]参加者たちは、このゲームから締め出されねばならない。彼らはゲームから生じる廃棄物であり、ゲームが終わりを迎えて管理者たちが呼び出されもしない限り、増え続ける運命にある廃棄物なのである」(括弧内は引用者)(Bauman 2007: 132)。現金やクレジットカードをもたない人間廃棄物たるアンダークラスの人びとは、消費社会から排除されて、残りの参加者たちへの見せしめとしての意味しかもたないような、社会のお荷物になっている(バウマン 2001=2008: 109-11)。消費社会に

8) 個人化されたリキッド・モダン社会では、社会的紐帯から切り離された脆弱な個人が自らのアイデンティティをつねに更新するために、消費による自由な選択を行わなければならないのだともされている(Bauman 1997: 106)。

おける人間の属性である選択の自由は、選択能力を必要とするものであり (Bauman 2007: 138), それを欠いたアンダークラスの人びとは必然的に社会から排斥されるのである。バウマンの考えでは、自由な個人からなる消費社会は、自由を欠いたアンダークラスの人びとを、つねにその二次的犠牲者 (collateral casualties) として生み出す格差社会でもあるがゆえに、非難されるべきなのである。

二番目の批判点は、消費社会における個人の自由は、「義務としての」選択の自由でしかない (Bauman 2007: 74) という論点に関わる。別の言い方をすれば、自由な選択権をもつ主体は、本当は個々の消費者ではないということである。消費社会における個人は自分自身に自由な選択権が帰属していると考えているが (そしてこれが「主体の物神化」と呼ばれる現象でもあったわけだが)、「主権者というものの究極の、それを定義づける特権とは除外する権利であるというカール・シュミットの命題を認めるならば、消費社会における主権能力の真の担い手は、商品市場だということになる」 (Bauman 2007: 65) というのである。商品市場だけが正しい消費者と欠陥のある消費者、消費社会の住人とアンダークラスの人びとを区別することができる。それゆえ、リキッド・モダンの消費社会における個々人の選択は、本当に主体的で自由な選択ではないとバウマンは考えるのである。

しかし消費者の選択が本当に主体的で自由な選択ではないことを示すには、本来のありうべき主体的選択のあり方、個人の自由に基づく別様の選択肢の可能性を同時に示しておく必要がある。そしてそのありうべき選択こそが道徳的選択であることはいうまでもない。

4. リキッド・モダン社会における道徳の可能性

バウマンによれば、リキッド・モダンの消費社会において、個人は「主観的には」自由な選択を行っているのであった。その一方で、リキッド・モダン社会における道徳は、不確実で不安定な社会的基盤のもとで、「他者のためにあること」を個人的に選択することを意味するのであった。それでは、この二つの「個人的な選択」は互いにどのような関係にあるのだろうか。

バウマンは、「～に合わせる責任」 (responsibility to), 例えば社会規範に合わせる責任と、「～のための責任」 (responsibility for), 例えば他者の幸福のための責任という言い方を区別することで、この関係を説明しようと試みている (Bauman & Tester 2001: 57)。すなわち、リキッド・モダンの消費社会では、消費者である個人個人が自分自身の関心や欲望を満足させるような選択を自由に行うことで、「自分自身に合わせる責任」 (responsibility to oneself) を果たしているのに対して、道徳的な選択をすることで他者の幸福や人間としての尊厳のための責任を果たすような人びとは、ほとんど見られないというのである。バウマンの言葉を引用しよう。

以前は他者に対する倫理的義務や道徳的関心という意味領域に存在していた、責任と責任ある選択という概念は、自己充足とリスク計算の領域へと移行してしまったか、もしくは現在、その移行中である。この過程で、責任の担い手であり、対象であり、その判断基準として認

識され、想定され、満たされてきた「他者」(The Other)は、行為者自身の自己によって、ほとんど視界から消し去られたり、押し退けられたりするか、その影を薄くさせられているのである (Bauman 2007: 92)。

こうしてリキッド・モダンの消費社会において、「他者のための責任」をとるという道徳的選択が、「自分自身に合わせる責任」⁹⁾をとることを目指す、消費者による商品の選択へと取って代わられ、新たな形での道徳の無関連化 (adiaphorizing) が進行しているのだとバウマンは述べる (Bauman 2007: ibid)。このとき、「他者のための責任」をとること、すなわち他者のために「責任をとったり、[他者を] 保護したり、道徳的であったりすることには、「合理的な」ものは確かに何も存在しない」(括弧内は引用者) (バウマン 2001=2008: 117) のであるとすれば、消費社会における商品の「自由な選択」という誘惑をあえて自ら断ち切るような個人が存在するとは到底思えないことになる。すなわち、消費社会というゲームへの参加者たちが自らの欲望にかなった「自分自身に合わせる責任」ではなく、「他者のための責任」を選択することは、ほとんどありそうにないことだといえる。

「主観的には」自由に、「自分自身に合わせる責任」をとることを選択し続けている消費者に対して、「他者のための責任」をとることを選択するような道徳的行為の可能性を対置することで、こうした消費者が自分自身の不自由さに、すなわち自らの選択の他にも「より良い」選択の可能性があると気づくのでない限り、バウマンの理論的枠組みのなかで、消費者が個人的に自らの選択を変える見込みは存在しない。しかもバウマンの議論では、これら二つの責任を比較するメタコードなるものは存在しないため、すべてはわれわれ個人の選択 (の選択) にかかっていることになる。

もちろん、バウマンのいう道徳的選択がまったく社会的な広がりをもたないわけではないといえる。先に見たバウマン流のアレゴリーを用いずとも、道徳的連帯の可能性は確かに存在しているように思えるからである。例えば、苦しみに歪んだ、具体的な他者の顔に複数の個人が同じようにさらされることで道徳的な選択を共有することは、グローバル化した現在においても (いや、そこにおいてこそ) 可能な事態である。再び、バウマンを引用しよう。

われわれはすべて、あらゆる人間に起こることに対して責任があるのであり、われわれの責任に対して責任をとるべきだというこの要請はいまや、もっとも遠く離れた場所での苦しみを含むような、地球上のあらゆる場所で生じている苦しみを緩和する必要性と関わっている。こうした新しい挑戦は、道徳的衝動が何世紀もの長きにわたって、他者との近接性のうちで働いてきたこと (そしてそれに本当によく馴染んできたこと) を考えるとき、「道徳的衝動」の耐用能力をその限界にまで (おそらくその限界を超えてまで) 押し広げることになっている。

9) 正確にいうと、バウマンは「自分自身に合わせる責任」と「自分自身のための責任」が一つになったものとして、消費社会の責任のあり方をとらえている (Bauman 2007: 92)。

いまやこの挑戦は、遠く離れた場所の、「抽象的な」他者、一度も出会ったことのないような「他者」とともに、直に経験したことなどほとんどないような悲惨さをも組み入れていく必要があるのだ (Bauman & Tester 2001: 145)。

メディアを通じたものという意味で「抽象的な」ものではあれ、苦しむ他者の具体的な顔 (例えば、アフリカの難民の顔) を地球上のさまざまな個人が共有することは可能である。しかしバウマン自身がこの引用のすぐ後ではっきりと述べているように (Bauman & Tester 2001: 146), メディアによるキャンペーンによって作りだされるのは、一時的な「憐れみの馬鹿騒ぎ」(carnivals of pity) でしかなく、こうした道徳的連帯が社会に根付くことはありえない。より一般的にいて、リキッド・モダン (ポスト・モダン) 社会における道徳的連帯の可能性とは、バウマンにとって「予言者ではない自分にはよくわからない事柄」でしかないとされるのである (Bauman, Cantell & Pedersen 2002 [1992]: 20)。

「法への一致」ではなく「アンビヴァレントな選択」として道徳をとらえるバウマンの道徳理論において、個人の道徳的衝動やその選択を「道徳的な二者関係」を超えて社会的に一般化・普遍化することは、具体的な他者の顔の消去につながるため、自らの道徳理論の自己否定にしかいたらない。その一方で、社会における道徳的連帯、多くの人びとによる「法への一致」に基づく倫理の共有とそれに基づく行動を抜きにしては、消費社会における個人的自由の専制に対抗する力を道徳がもつことはできないとも考えられる。そしてまさにここに、バウマンの社会理論における大きなディレンマが存在していることを指摘できるのである。

5. おわりに

これまでバウマンにおける道徳と消費社会の関係について見てきた。そこには社会的基盤を欠いた個人主義的な道徳概念によって、市場原理に基づく消費社会を批判しようとするに由来するディレンマが存在していた。そしてこれと同様のディレンマは、社会的紐帯を奪われ個人化した市民たちによって、リキッド・モダンの社会的現実を批判しようとする場合にも、同じように生じてしまうことになる。

例えば、社会規範の解体を招く不安定な個人化社会、「私」による「公」の植民地化、福祉国家を突き崩すグローバルな消費者中心主義といったリキッド・モダンの現実に対抗するには、自律的な個人が政治的に討論する場、すなわち現代のアゴラを作り出すことで、われわれ市民にとっての「より良い」社会を政治的に再構築することが必要だ、とバウマンはさまざまところで述べている (例えば、バウマン 2001=2008: 151-2)。けれども別の文脈では、個人化の進行によって社会的基盤が脆弱化するなかで、先に見た道徳の個人化と同じ性格をもたざるをえない市民の個人化／非連帯性という理論的制約のゆえに、このアゴラの可能性がバウマン自身によっていとも簡単に否定されてしまうのである (バウマン 2001=2008: 71-2)。

バウマンの社会理論がリキッド・モダン社会における別様の可能性をつねに探りつつも、全体

としてはペシミスティックな印象を与えてしまう原因は、こうしたディレンマに由来するものだと考えることができる。道徳的により良い社会像を求めながらも、それを一般的な形で提示することをためらうこと。あるいは道徳的正しさへの確信から、政治的に揺るぎのない行動を社会的に一般化して広げていく姿勢を疑うこと。こうした傾向がたとえバウマンのナチズム体験に基づくもののだとしても、それを自らの社会理論に組み込んだがゆえに、バウマンの社会理論はその批判理論としての切れ味を失う結果になってしまっているのである。

しかし、事態はこうも考えられる。バウマン流の「アンビヴァレントな選択」に基づく個人主義的な道徳理論は、つねに社会規範としての「法への一致」へと墮してしまふ、凡百の社会学的な批判理論を超える射程をもつものである。なぜなら見返りを求めずに他者のために行われる無償の道徳的行為は、それが寄り集まることで確固たる社会的連帯へと凝固することはないかもしれないが、既存の社会制度をいわば垂直に貫く力として働くことで、どんな社会制度に対しても大きな変革を現実にながすものでありえるという、道徳理論にとって一番肝心な点が明確に定式化されているからである。それゆえ批判理論のうちへと回収されない道徳理論、つまりバウマンの社会理論の内部にパラドキシカルな形で組み込まれているこの道徳理論は、それを理論的なディレンマと見なす視点を克服することができれば、あらゆる社会的現実に対し鋭く切り込むモラリストとしてのバウマンを呪縛から解き放つ基盤ともなり得るものだといえる。われわれとしては、バウマンの道徳理論のもつこうした可能性を、バウマンとは異なった新たな理論的見通しのもとに引き継ぐことの重要性を指摘して、本稿のとりあえずの結びに代えたいと思う。

参 考 文 献

- Abbinnett, Ross, 2002 [1998], "Postmodernity and the Ethics of Care: Situating Bauman's Social Theory", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. III*, Sage, pp.106-32.
- Bauman, Zygmunt, 1989, *Modernity and the Holocaust*, Polity Press. (= 森田典正訳, 『近代とホロコースト』, 大月書店, 2006)
- , 1993, *Postmodern Ethics*, Blackwell.
- , 1995, *Life in Fragments*, Blackwell.
- , 1997, *Postmodernity and its Discontents*, Polity Press.
- , 1998, "What prospects of morality in times of uncertainty?", *Theory Culture and Society*, 15 (1): pp.11-22.
- , 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press. (森田典正訳, 『リキッド・モダニティ』, 大月書店, 2001)
- , 2001, *The Individualized Society*, Polity Press. (澤井敦ほか訳, 『個人化社会』, 青弓社, 2008)
- , 2004, *Wasted Lives*, Polity Press. (中島道男訳, 『廃棄された生』, 昭和堂, 2007)
- , 2005 [1998], *Work, Consumerism and the New Poor* (Second Edition), Open University Press. (伊藤茂訳, 『新しい貧困 労働, 消費主義, ニュープア』, 青土社, 2008)
- , 2005, *Liquid Life*, Polity Press. (長谷川啓介訳, 『リキッド・ライフ』, 大月書店, 2008)
- , 2007, *Consuming Life*, Polity Press.
- , 2008, *Does Ethics have a Chance in a World of Consumers?*, Harvard University Press.
- Bauman, Zygmunt and Keith Tester, 2001, *Conversations with Zygmunt Bauman*, Polity Press.
- Bauman, Zygmunt, Timo Cantell and Poul Poder Pedersen, 2002 [1992], "Modernity, Postmodernity and Ethics: An Interview with Zygmunt Bauman", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. I*, Sage, pp.15-26.
- Davis, Mark, 2008, *Freedom and Consumerism*, Ashgate.
- Junge, Matthias, 2002 [2001], "Zygmunt Bauman's Poisoned Gift of Morality", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman*

- vol. III*, Sage, pp.191-204.
- Kellner, Douglas, 2002 [1998], "Zygmunt Bauman's Postmodern Turn", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. II*, Sage, pp.333-46.
- Lash, Scott, 2002 [1996], "Postmodern Ethics: The Missing Ground", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. II*, Sage, pp.347-59.
- 熊野純彦, 1999a, 『レヴィナス入門』, 筑摩書房。
- , 1999b, 『レヴィナス 移ろいゆくものへの視線』, 岩波書店。
- 中島道男, 2007, 「バウマンの社会理論 ポストモダニティ・道徳性・デュルケム」, 『社会学史研究』(第29号), 日本社会学史学会, 3-19頁。
- , 2009, 『バウマン社会理論の射程』 青弓社。
- Ritzer, George, 2002 [1997], "Zygmunt Bauman: From Modern to Postmodern", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. II*, Sage, pp.360-75.
- Smart, Barry, 2002 [2001], "Zygmunt Bauman", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. I*, Sage, pp.182-94.
- Warde, Alan, 2002 [1994], "Consumers, Identity and Belonging: Reflections on some Theses of Zygmunt Bauman", in Beilharz, P. ed., *Zygmunt Bauman vol. IV*, Sage, pp.40-55.

[帝京大学文学部准教授]